

<研究ノート> ラフカディオ・ハーン “*Glimpses of Unfamiliar Japan*” Preface の読解 —— 仏教を手がかりにして

菊地 敬仁

目次

第1章 はじめに

- 第1節 ラフカディオ・ハーンについて
- 第2節 “*Glimpses of Unfamiliar Japan*” について
- 第3節 研究の動機

第2章 “*Glimpses of Unfamiliar Japan*” Preface の読解

- 第1節 Preface の読解にあたって
- 第2節 第1・2段落 —— ミットフォード “*Tales of Old Japan*” の引用と意義
- 第3節 第3段落 —— Preface における「仏教 (Buddhism)」
 - 1. 第1文の読解
 - 2. 第2文以降の読解
 - 3. まとめ

第3章 おわりに

- 第1節 第6段落の日本語訳
- 第2節 研究の結論
- 第3節 今後の課題

テキスト・参考文献

資料 “*Glimpses of Unfamiliar Japan*” Preface の本文・現代語訳の対応表

第1章 はじめに

第1節 ラフカディオ・ハーンについて

ラフカディオ・ハーン (Lafcadio Hearn, 1896年に日本に帰化し「小泉八雲」と名乗る) は、1850年にギリシャのレフカダ島で生まれる。イギリスなどで幼少期・青年期を過ごし、1869年、19歳で単身渡米、シンシナティやニューオーリンズなどで主に新聞記者・ジャーナリストとして生活した。1884年、ニューオーリンズで万国博覧会が開かれた際、ハーンは日本館の展示に非常に大きな関心を持ち、熱心に取材を行った。これが、ハーンが日本という国を意識した出来事の一つである。そして1890年、40歳のとき、当時契約を結んでいたハーバー社の記者として来日を果たすことになる。横浜にしばらく滞在したあと、松江で島根県尋常中学校・尋常師範学校、熊本で第五高等中学校の英語教師となる。神戸でジャパン・クロニクル社に勤めたのち、1896年、東京へ転居し、帝国大学文科大学の外国人教師として英文学などを講じる(1903年まで)。ハーンは1904年、54歳で亡くなるが、14年間の日本時代に、日本文化に関係する著書を計12作品出版し、欧米圏に日本文化を広く紹介した。

第2節 “*Glimpses of Unfamiliar Japan*” について

本論で取り上げる “*Glimpses of Unfamiliar Japan*” (1894、以下原則「*Glimpses*」と省略する) は、ハーンの来日後の第一作で、来日直後の日本に対する新鮮な印象がつつられた長大なエッセイである。

内容について確認する前に、書誌情報を整理しておきたい。まず *Glimpses* の全体的な日本語訳には、平井呈一(1902-1976、翻訳家)によるものと、池田雅之(1946-、比較文学者)によるものが存在する。具体的には以下の通りである。

- ・平井呈一訳 … 『全訳小泉八雲作品集』第5巻・第6巻(恒文社、1964)
『日本瞥見記(上)』『日本瞥見記(下)』(恒文社、1975)
- ・池田雅之訳 … 『新編日本の面影』(角川ソフィア文庫、2000)
『新編日本の面影II』(角川ソフィア文庫、2015)

平井氏は、*Glimpses* を含めたラフカディオ・ハーンのすべての著作の翻訳を行った。上記の『日本瞥見記(上)』『日本瞥見記(下)』は、『全訳小泉八雲作品集』第5巻・第6巻とほぼ同内容のソフトカバー版である。

一方池田氏は、早稲田大学名誉教授で、小泉八雲研究を長年リードしてきた比較文学者でありながら、上記の文庫本は彼が編者として *Glimpses* の特定の章を恣意的に選んだ「抄訳(アンソロジー)」であるとともに、本文の読みやすさを重視しているためか、形式段落を分けるなどの意図的な改変が見られる。さらに、書名の『日本の面影』であるが、原題を直

訳すれば「よく知られていない日本をちらっと見た（瞥見した）こと」であり、ハーンがつけたタイトルの意味はほとんど読み取れない。また、池田氏が翻訳に採用した章は「外国人が日本のことを褒め称えた、日本のすばらしさを発見した」と読めてしまうエピソードがほとんどで、*Glimpses*に込められた様々な情報が欠落している。

さて、話題が逸れてしまったが、この「欠落した情報」に「来日直後のハーンにとっての仏教」も含まれているのである。池田訳は手に取りやすく、読みやすく洗練された日本語で書かれているが、この2冊のみでは、たとえば「ハーンが来日時により強い興味を持っていたのは神道ではなく仏教だったのではないか」などの考察は不可能なのである。本論では、あくまでもハーンの本文に立ち戻りながら考察を進めていきたい。

*Glimpses*は1894年に熊本で書かれた。ハーンは1890年4月に来日し、横浜周辺での生活を経て、同年9月に英語教師として島根県の松江に赴任する。同書には、松江での生活や思索したこと、外国人として初めて本殿への参拝が許された出雲大社での経験などが詳細に記されている。そして、松江を去り熊本へ向かう一日の様子を描いた Chapter27. Sayonara! でこの作品は結ばれる。ほとんどが松江時代の記録だが、Chapter1 から Chapter6 までは、来日直後・横浜時代・松江に向かう道中のことが述べられている点も重要である。

*Glimpses*は、目次からおおよその内容が推測できるので、以下にそれを示す。なお、日本語訳は平井呈一による。

	<i>Glimpses of Unfamiliar Japan</i>	日本瞥見記
	Preface	はしがき
第1章	My First Day in the Orient	極東第一日
第2章	The Writing of Kobodaishi	弘法大師の書
第3章	Jizo	地藏
第4章	A Pilgrimage to Enoshima	江の島行脚
第5章	At the Market of the Dead	盆市で
第6章	Bon-Odori	盆おどり
第7章	The Chief City of the Province of the Gods	神々の国の首都
第8章	Kitzuki: The Most Ancient Shrine in Japan	杵築—日本最古の神社
第9章	In the Cave of the Children's Ghosts	潜戸——子供の亡霊岩屋
第10章	At Mionoseki	美保の関
第11章	Notes on Kitzuki	杵築雑記
第12章	At Hinomisaki	日ノ御碕
第13章	Shinju	心中
第14章	Yaegaki-Jinja	八重垣神社
第15章	Kitsune	キツネ
第16章	In a Japanese Garden	日本の庭
第17章	The Household Shrine	家庭の祭壇

第18章	Of Women's Hair	女の髪
第19章	From the Diary of an English Teacher	英語教師の日記から
第20章	Two Strange Festivals	二つの珍しい祭日
第21章	By the Japanese Sea	日本海に沿うて
第22章	Of a Dancing-Girl	舞妓
第23章	From Hoki to Oki	伯耆から隠岐へ
第24章	Of Souls	魂について
第25章	Of Ghosts and Goblins	幽霊と化けもの
第26章	The Japanese Smile	日本人の微笑
第27章	Sayonara!	さようなら

第3節 研究の動機

筆者は「ラフカディオ・ハーンと『古事記』」というテーマで修士論文の執筆に取り組んでいる。ハーン作品で『古事記』に関係する記述が多く含まれているのが、来日後の第一作である *Glimpses of Unfamiliar Japan* (1894、邦題『日本瞥見記』『知られぬ日本の面影』など) と *Japan: an Attempt at Interpretation* (1904、邦題『日本：一つの試論』『日本：一つの解明』『神国日本』など) の2つである(遠田勝「古事記」『小泉八雲事典』、2000)。ハーンは来日以前に、イギリス人言語学者・日本研究者であるバジル・ホール・チェンバレン(Basil Hall Chamberlain、1850-1935)による『英訳古事記』(*KO-JI-KI, Records of Ancient Matters*, 1882)を読んでおり、大きな興味・関心を持ったとされる。来日後、「古事記神話の聖地」である松江に流れ着いたハーンは、「古き良き日本の姿」や「古事記神話や神道の考え方を受容している人々」を見て、興奮したに違いない。その証拠に、*Glimpses* のChapter7以降、すなわち松江での生活の記述が始まると、『古事記』や神道に関する記述が増加する。修士論文執筆の都合上、そのChapter7以降を優先的に読んでしまっていたが、今回「仏教」に注目して *Glimpses* を再読したところ、関係する記述がChapter6以前に非常に多く登場することを改めて認識できた。松江での生活が始まる前のChapter6以前は「仏教」、始まった後のChapter7以降は「神道」と、重きをおかれて言及される宗教がはっきりと異なるのである。

ハーンは事実上の遺作である *Japan: an Attempt at Interpretation* で「日本文化のあらゆる基礎には神道がある」と主張した。*Glimpses* でも松江や出雲のエピソードが有名で、ハーン作品において神道のイメージが強いのは確かであろう。しかし、たとえば彼は *Gleanings in Buddha-Fields* (1897、邦題『仏の畑の落穂』『仏国土拾遺』など) で、日本の仏教説話について言及したり、「涅槃」について考察したりしている。ハーンは松江での生活以降も仏教を無視しているわけではないのだ。

では、来日後の作品で最初に「仏教」について述べられているのはどの部分か。それがまさに *Glimpses* 冒頭のPrefaceなのである。ハーンはChapter7以降に熱心に言及する「神

道」よりも前に「仏教 (Buddhism)」という語を用いて Preface を書き上げている。

本論では、Preface を「仏教」に注目しながら精読していく。特に、*Glimpses* のテーマが書かれていると思われる第1・2段落、仏教についての言及が多い第3段落を中心に読解と考察を行う。

第2章 “*Glimpses of Unfamiliar Japan*” Preface の読解

第1節 Preface の読解にあたって

上述の目次から分かる通り、*Glimpses* にはそれ以降の内容からは独立した Preface が存在する。この Preface は、「はしがき (平井訳)」「はじめに (池田訳)」「まえがき」のような訳が適当だろう。Preface の末尾には、「L. H. KUMAMOTO, KYUSHU, JAPAN, May, 1894. (平井・池田ともに「一八九四年五月 日本 九州 熊本にて ラフカディオ・ハーン」と訳す)」とこの文章が書かれた具体的な年月が記されているが、これが *Glimpses* という大著の執筆前に書かれたのか、完成後に書かれたのか、つまり、Preface という短文が *Glimpses* の執筆作業において、具体的にどの段階で書かれたものかは、この部分だけでは分からない。しかし、精読の結果、この問題に対する一つの解答が得られた。本章第3節の1の末尾で詳述する。

さて、*Glimpses* にはいわゆる「あとがき」が存在しない。これがハーンの著作の特徴なのか、この時代の西洋人評論家の一般的な書き方なのか、といった問題はここでは措くが、いずれにしても、第1章から第27章までの本論と次元が異なる情報は Preface のみであり、この文章の異質性が際立つ。末尾に執筆年月が記されていることや、「あとがき」にあたる文章がないことから、筆者は、この部分に *Glimpses* 全体を代表するハーンの考えが含まれているのではないかと考えた。

では、**資料**を用いて「ハーンによる本文」「平井呈一訳」「池田雅之訳」の3つを対照させながら、「仏教」に注目しつつ Preface を講読していく。

第2節 第1・2段落 —— ミットフォード “*Tales of Old Japan*” の引用と意義

Glimpses の Preface は、イギリス人外交官であったアルジャーノン・バートラム・フリーマン＝ミットフォード (Algernon Bertram Freeman-Mitford, 1837-1916) の *Tales of Old Japan* (『古い日本の物語』, 1888) の引用から始まる^(注1)。ミットフォードは、アーネスト・サトウ (Sir Ernest Mason Satow, 1843-1929) と同時期に日本に滞在し、幕末から明治時代初期までの変化期の日本を「外交官」として生きた人物である (具体的には1866年10月から1870年1月まで滞在した)。そのミットフォードが帰国後に著したのが *Tales of Old Japan* で、この書物には *The Forty-seven Ronins* のエピソードや *Harakiri* についての考察が書かれており、西洋に「赤穂事件」や日本の「切腹」の文化を紹介した本として知られて

いる。

さて、Prefaceは「In the Introduction to his charming "Tales of Old Japan," Mr. Mitford wrote in 1871:」という表現から始まる。ここに「Introduction」という語があり、平井・池田両氏ともに「序文」と訳しているのだが、これは誤りを含む表現であることが分かった。というのも、ハーンが引用したこのミットフォードの文は、*Tales of Old Japan*のPreface（「Introduction」という表記ではなかった）には存在しなかったからである（注²）。*Tales of Old Japan*にはPrefaceの後にThe Forty-seven Roninsの章がある。その章の最初にこの引用文があるのだ。つまり、ミットフォードにとって、ハーンが引用した文章は、*Tales of Old Japan*の序文ではなく、「赤穂事件」のエピソードの導入だったわけである。

となると、これは訳者の問題というよりも、ハーンの情報誤りによる問題と言えそうである。The Forty-seven Roninsの最初の文章を、「the Introduction to his charming "Tales of Old Japan"」と表現するのはやはり誤っている。繰り返しになるが、これは*Glimpses*の冒頭の情報である。書きはじめにはどのような著者も気を遣うはずだが、ハーンは書誌情報の扱いも含めて、細かい事実の確認にあまり意識を向けないところがあるようだ。

（注1）ミットフォードの*Tales of Old Japan*は、ハーン蔵書として富山大学附属図書館「ヘルン文庫」に保管されている。目録を確認したところ、全2435点のうち「VI. ORIENTALIA（東洋）」の「1. JAPAN（日本）」という分類の972番であった。以下、書誌情報を転記する。

[972]

Mitford, A. B.

Tales of old Japan / by A. B. Mitford. - London: Macmillan, 1888. xii, 383 p. ; 19 cm. - (Macmillan's colonial library)

（注2）*Tales of Old Japan*は、「[Internet Archive: Digital Library of Free & Borrowable Books, Movies, Music & Wayback Machine](https://www.internetarchive.org/)」を利用し、デジタル化された同書でその記述を確認した。

ハーンはミットフォードの作品から、西洋人の多くが理解できないという「the inner life of the Japanese」（池田訳「日本人の内なる生活」）、すなわち「their religion, their superstitions, their ways of thought, the hidden springs by which they move」（池田訳「日本人の宗教、迷信、思考様式、彼らを突き動かす隠れた原動力」）を引用し、自らはそれを観察することができたとする。第2段落の第1文を引用してみよう。

This invisible life referred to by Mr. Mitford is the Unfamiliar Japan of which I have been able to obtain a few glimpses.（傍線部は筆者が付した。これ以降、引用文中の傍線部や記号は筆者が付したものとする）

（平井訳）ミットフォード氏が言及したこの日本人の精神生活こそは、わたくしがこんにち

までに、多少なりともその片鱗をとらえることのできた、いわゆる「世界に知られざる日本」である。

(池田訳) ミットフォード氏が言及する日本人の生活こそ、私がわずかながら垣間みることのできた、「知られざる日本」の姿である。

ハーンは、ミットフォードの「the inner life of the Japanese」を「this invisible life」と言い換え、ハーン独自の語句「the Unfamiliar Japan」と「a few glimpses」を無理なく導入する。まさにこれが *Glimpses of Unfamiliar Japan* という書名の由来である。書名がその本のテーマを示している、という多少強引な考え方をすれば、ハーンの *Glimpses* における主題は「日本人の宗教などの内面生活」であるといえることができるだろう。

ハーンはミットフォードの *Tales of Old Japan* の一節を引用することで、*Glimpses of Unfamiliar Japan* という書名の由来を説明したのである。

第3節 第3段落 — Preface における「仏教 (Buddhism)」

1. 第1文の読解

前節では Preface の第1・2段落を精読し、*Glimpses* のテーマが「日本人の宗教などの内面生活」なのではないか、という考察を行った。そして、第3段落は次の一文で始まる。

The popular religious ideas—especially the ideas derived from Buddhism—and the curious superstitions touched upon in these sketches are little shared by the educated classes of New Japan.

傍線部で示した通り、ここで初めて「Buddhism (仏教)」という語が登場する。この文を平井・池田両氏は次のように訳している。

(平井訳) 日本の民間信仰——ことに仏教に由来する宗教観念、つまり本書のなかで触れておいたような、世にも珍奇な迷信は、これは新しい日本の知識階級のあいだではほとんど信じられていない。

(池田訳) 本文で触れているような、日本の民間信仰、とりわけ仏教から派生した考え方や、珍しい迷信などは、新しい日本の知識階級にはほとんど受け入れられていない。

分析すると両氏の解釈は一致していないことが分かる。平井氏は「日本の民間信仰」の一つに「仏教から派生した考え方」があり、「つまり」を用いて、それを「世にも珍奇な迷信」と言い換えている。それに対して、池田氏の訳では「日本の民間信仰」「仏教から派生した考え方」「珍しい迷信」の3つの情報の関係があいまいで、「日本の民間信仰」のなかに「仏教から派生した考え方」と「珍しい迷信」が含まれているとも読める。

最も大きな問題は、「touched upon in these sketches (本書のなかで触れておいたような、本文で触れているような)」が修飾する情報についてである。平井氏は「世にも珍奇な迷信」を修飾させている。池田氏の訳では、前述の通り、修飾される情報となりうる3つの語句の関係があいまいで断定ができない。

では、どのように解釈するのが適切なのか。改めてハーンの文を示す。

The popular religious ideas (—especially the ideas derived from Buddhism—) and the curious superstitions (touched upon in these sketches) are little shared by the educated classes of New Japan.

まず、ダッシュ (一) に挟まれた情報は、その直前の情報の補足・言い換えであることが多い。今回はどちらにも ideas が含まれており、especially もあることから、平井訳「日本の民間信仰——ことに仏教に由来する宗教観念」という解釈が適切であると判断する。

次に「the curious superstitions (世にも珍奇な迷信、珍しい迷信)」だが、ダッシュから外されていること、等位接続詞 and があることから、これが「The popular religious ideas (日本の民間信仰)」と並立して述べられた情報であると判断する。平井訳は「つまり」を用いて、この2つの情報が言い換え・同じの意味の情報としていた。これは誤りではなかろうか。「The popular religious ideas」の訳は「日本の民間信仰」でよいのかなどの問題はあるが、それはここで割愛する。

以上のように考えれば、「touched upon in these sketches」は、2つの主部「The popular religious ideas」と「the curious superstitions」を修飾しており、are 以下が述部であると考えることができる。整理すると、以下ようになる。

The popular religious ideas (主部①)
—especially the ideas derived from Buddhism— (主部①の補足)
and (主部①と主部②を並立して接続)
the curious superstitions (主部②)
touched upon in these sketches (主部①と主部②を修飾)
are little shared by the educated classes of New Japan. (述部)

第1文は池田訳を書き換え、「本文で触れているような、日本の民間信仰——とりわけ仏教から派生した考え方——や、珍しい迷信は、新しい日本の知識階級にはほとんど受け入れられていない。」と訳すことにする。この文から分かるのは、この部分で、ハーンは「本文 (these sketches)」すなわち *Glimpses* の本文において、「日本の民間信仰——とりわけ仏教から派生した考え方——」と「(日本の) 珍しい迷信」を取り上げていることを宣言しているということである。

このことから、本章第1節で言及した「*Glimpses* の Preface はいつ書かれたのか」という問題に対して一つの解答を示すことができる。おそらくハーンは、*Glimpses* の本文をすべて書き終えた後、少なくともそれに近い状況で Preface を執筆したのだろう。「these (こ

れらの) sketches」という表現から、筆者は、ハーンが *Glimpses* の完成原稿を前にして Preface を書いている姿を想像する。事実、Chapter1 から Chapter27 には、たくさんの「the popular religious ideas—especially the ideas derived from Buddhism—」と「the curious superstitions」が収められている。それが分かっていなければ、この第1文は書けないだろう。「touched upon」という表現も、以上の考察に确实性を加えているように思われる。

2. 第2文以降の読解

さて、第1文の精読の結果、Preface および *Glimpses* 全体における「仏教」は「民間信仰」に付属する概念であることが考察できた。筆者は *Glimpses* を通読しているが、本書においてハーンが記述しているのは、「仏教の教えそのもの」についてというよりも、第1文にある通り、「仏教の教えから派生した(民間)信仰」についてであった。

それが書かれている部分としてまず挙げられるのが、冒頭の6章であろう。これらの内容については論旨から外れるため詳述しないが、一例として、Chapter1. My First Day in the Orient における、来日直後のハーンが人力車に乗って複数の仏教寺院を訪れるエピソードが挙げられる。Chapter1 の第6節には「“Tera e yuke!”」や「I want to visit a Buddhist temple.」など、ハーンが仏教寺院に興味を持っていることが分かる表現が見られる。また、それぞれの寺院で出会った人やものを丁寧に描写したり、僧侶たちと仏教について対話したことを記録したりと、Chapter1 は、来日直後のハーンが仏教に関する様々な事象に興味を抱いていたことを示す章と見ることもできる。

話題を戻すが、そもそも第3段落の第1文の内容は、「仏教に由来するような民間信仰」や「迷信」が近代日本の知識人にはほとんど受け入れられていないというものであった。ハーンは第3段落全体を通して、この情報を補足し発展させている。第2文以降、注目すべき文をピックアップし、考察を深める。

〈第5文〉

For him, superstitions are simply superstitions; their relation to the emotional nature of the people interests him not at all.

(平井訳) かれらにとっては、迷信はたんに迷信なのであって、迷信と国民情操の関連性などということは、いっこうに興味のないことなのである。

(池田訳) 彼らにとって、迷信はただの迷信でしかないのだ。迷信と日本人の情緒との関連性などに至っては、まったくもって興味の対象外である。

ここでの「かれら・彼ら」は「近代日本の知識人」を指すが、この一文をもって、第2文から第4文までの具体情報がまとめられる。注目すべきは、第1文にあった「民間信仰」と「仏教」の語が消え、「迷信 (superstition)」のみが取り上げられていることである。平井氏は、この部分から「迷信」が他の2語と比較してより抽象的な概念であると判断し、第1

文を前述のように訳したのではないだろうか。

〈第6文〉

And this not only because he thoroughly understands that people, but because the class to which he belongs is still unreasoningly, though quite naturally, ashamed of its older beliefs.

(平井訳) しかも、このことは、かれらが自国の国民というものを、手の裏まで知りつくしているからというためばかりではなく、かれらの所属している上層知識階級が、今もなお理くつなしに、ただもう自分の国の古い信仰は恥ずべきものだと思いこんでいることに起因しているのである。

(池田訳) それというのも、日本人がみずからを徹底して理解しているからというだけでなく、その知識階級が、きわめて当然のこととはいえ、いまだに訳もなく、自分たちの古い信仰を恥じているせいでもある。

この文は、第5文以前の記述の理由を説明している点で、内容の性質が異なる。池田氏は現代語訳にあたってこの部分で形式段落を分け、それを分かりやすく示している。「迷信 (superstition)」と限定されていた情報が「古い信仰 (older beliefs)」と言い換えられ、意味の幅が広がっていることを意識したい。

〈第7文〉

Most of us who now call ourselves agnostics can recollect the feelings with which, in the period of our fresh emancipation from a faith far more irrational than Buddhism, we looked back upon the gloomy theology of our fathers.

(平井訳) もっとも、これはしかし考えてみればむりもないことで、われわれ西欧人にしても、こんにち、その大多数は、人間の知識などというものは絶対なものではない、おれたちは不可知論者だ、などといって空うそぶいているけれども、そのわれわれが、あの仏教なんぞよりはるかに不条理きわまる、古い信仰から新しく解放された時には、われ人ともに、自分たちの先祖の蒙昧暗愚な神学をふりかえってみて、うたた感慨なきをえなかったことを思い出すことができる。

(池田訳) 人間の知識を絶対視しない不可知論者を自称するほとんどの西洋人なら、仏教よりも遥かに不合理な信仰から解放され、われらが先祖の暗澹たる神学を振り返ったときの感情を思い出してみればよからう。

この文でハーンは、明示してはいないが「キリスト教」を批判している。同じ「宗教」であることを利用して「仏教」を取り上げているのである。

〈第8文〉

Intellectual Japan has become agnostic within only a few decades; and the suddenness of this mental revolution sufficiently explains the principal, though

not perhaps all the causes of the present attitude of the superior class toward Buddhism.

(平井訳) ところで、日本の知識人は、ほんのここ二、三十年のあいだに不可知論者になったのである。この精神的進歩のあわただしさ、これがそもそも、日本の知識階級の仏教に対する態度の、まさか全部とはいえないまでも、すくなくとも主要な原因を解明してあまりあるものであろう。

(池田訳) 知性ある日本は、このたった二、三十年の間に不可知論を唱えるようになった。このように精神的な変革が急激に行われたことが、今の上流階級の仏教に対する態度の原因のすべてである、とまでは言わないまでも、主要な原因の説明にはなるのではなからうか。

第7文・第8文を通して、ハーンは、西洋と日本を対比することで、近代日本の知識階級が仏教を忌避する理由を論じている。その論理は以下の通りである。

西洋人のほとんどは「不可知論者 (agnostics、人間には知ることのできない領域が存在すると考える人々)」である。そのような西洋の不可知論者は、キリスト教が不合理であることを理解している。それに対して、日本人は近代化によって「精神的な変革が急激に行われた」ため、知識階級を中心に不可知論者が急速に誕生した。そのような(早熟な)日本の不可知論者は、西洋におけるキリスト教と同じように、仏教を不合理なものとして処理しようとしている。ただし仏教はキリスト教と比べて「はるかに不合理」ではないため、西洋におけるキリスト教ほどに排除する必要はない。

3. まとめ

第3段落の最終文である第9文には、「迷信 (superstition)」が再び登場する。このことから推測できるのは、おそらくハーンは「民間信仰」「仏教」「迷信」の語の使い分けをそれほど厳密には行っていなかったのではないかと、ということである。

そもそも、これら3つの情報を意識的に取り上げたのは、本研究プロジェクトのテーマに基づき、「仏教」に注目して *Glimpses* の Preface を読もうとしたためであった。Preface において「仏教 (Buddhism)」の語が初めて登場するのが第3段落の第1文であり、それを分析した結果が、前述の使い分けの考察(「日本の民間信仰——とりわけ仏教から派生した考え方——」と「(日本の) 珍しい迷信」)だったのだ。しかし実際のところ、多く用いられるのは「迷信」で、「仏教」は「民間信仰」に影響を与えたものというよりも、キリスト教と対比される宗教として援用された。

では、この章で行った読解・考察に意味はなかったのか。そうではないだろう。あくまでもこの使い分けが不安定だったのは Preface のなかだけのことであり、*Glimpses* 全体の読解にあたって、「日本の民間信仰——とりわけ仏教から派生した考え方——」と「(日本の) 珍しい迷信」という分類の視点は有用であると思われる。

第4段落・第5段落は仏教に関係する情報がほとんど見られない。はっきりと分かるのは、

以下に示した第4段落第2文の一部くらいである。そのため本稿では割愛するが、必ず読解・考察しなければならない部分であり、今後の課題とする。

It is to be found among the great common people, who represent in Japan, as in all countries, the national virtues, and who still cling to their delightful old customs, their picturesque dresses, their Buddhist images, their household shrines, their beautiful and touching worship of ancestors.

(平井訳) これはどこの国でも同じことだが、日本のうちでも、この国の国民的美徳を代表している一般大衆——つまり、こんにちなお自分たちの固有の美しい習俗になずみ、絵のように美しい着物を身にまとい、そして仏の御身影やら神ぜせりに、かれら固有の、あわれにも麗しい祖先崇拜の心を牢として固く守りつづけている大衆のなかに、それは見いだされるのである。

(池田訳) どこの国でもそうであるように、その国の美徳を代表している庶民の中にこそ、その魅力は存在するのである。その魅力は、喜ばしい昔ながらの慣習、絵のようなあでやかな着物、仏壇や神棚、さらには美しく心温まる先祖崇拜を今なお守っている大衆の中にこそ、見出すことができる。

第4章 おわりに

第1節 第6段落の現代語訳

資料で示した通り、Prefaceの第6段落について、平井・池田両氏ともに翻訳を行っていない。ここではその現代語訳を試みる。第6段落は以下の2文からなる *Glimpses* の「書誌情報」である。

Of the twenty-seven sketches composing these volumes, four were originally purchased by various newspaper syndicates, and reappear in a considerably altered form, and six were published in the "Atlantic Monthly" (1891-93). The remainder, forming the bulk of the work, are new.

(筆者訳) これらの巻(上下2巻)を構成する27の短編(27章)のうち、4つはもともと様々な新聞雑誌連盟に購入されたもので、(それに)かなり変更を加えた形で再び収録する。そして6つは、1891年から1893年までの間に「アトランティック・マンスリー誌」で発表されたものである。この本の大半を構成しているその他(17の短編)は新たな書き下ろしである。

「様々な新聞雑誌連盟 (various newspaper syndicates)」については、当時の出版事情を知るためにもさらなる調査が必要で、結果としてその4章がどの章なのか明らかにでき

る可能性がある。

一方、「アトランティック・マンスリー誌 (the "Atlantic Monthly")」は、1857年、アメリカのボストンで創刊された歴史のある雑誌である。2004年に「アトランティック誌 (the Atlantic magazine)」と改名されたが、公式サイトデータベースで「Lafcadio Hearn」と検索すると、ハーンが執筆した記事を含め、108件のヒットがあった。その中で条件に合った記事を整理すると、以下ようになる。

- ① September 1891 At the Market of the Dead → Chapter5
- ② November 1891 The Chief City of the Province of the Gods → Chapter7
- ③ December 1891 The Most Ancient Shrine in Japan → Chapter8
- ④ July 1892 In a Japanese Garden → Chapter16
- ⑤ March 1893 Of a Dancing Girl → Chapter22
- ⑥ May 1893 The Japanese Smile → Chapter26

第6段落で言及された「6つの章」が明らかになり、これらの短編が *Glimpses* 執筆前の来日後早い段階で書かれていたことが分かった。「アトランティック・マンスリー誌」については今後も注目していきたい。

第2節 研究の結論

本論において筆者は、第1章で議論の前提となる情報をまとめた後、第2章において *Glimpses* の Preface を「仏教」に注目して精読した。第2章第2節では、Preface の第1・2段落の読解を行った。結果、ハーンが引用したミットフォードの *Tale of Old Japan* の一節はその「序文」ではなく「赤穂事件について述べた章の冒頭部分」であることが明らかになった。これはハーンの記憶違いによるミスであろう。またハーンは、この引用を効果的に用い、*Glimpses of Unfamiliar Japan* という作品のタイトルの由来を示した。同時に、*Glimpses* のテーマは「日本人の宗教などの内面生活」であることを考察した。

第2章第3節では、Preface の第3段落の読解を行った。この節が本論の核だが、考察が多岐にわたりまとめることが難しい。その中でも、第1文の分析によって整理できた、「日本の民間信仰——とりわけ仏教から派生した考え方——」と「(日本の) 珍しい迷信」という分類の視点は、今後の *Glimpses* の読解に活かしていきたい。

第3章第1節では、平井・池田両氏が手をつけていなかった第6段落を現代語訳したことで、*Glimpses* の本格的な執筆の前に書かれていた6つの章が明らかになった。

第3節 今後の課題

まず、Preface の第4・5段落の精読を試みたい。今回は割愛してしまったが、第4段落

には次のような一節が存在する。

…—these and a hundred other pretty sights are due to fancies which, though called superstitious, inculcate in simplest form the sublime truth of the Unity of Life.

(平井訳) …——こうした景色や、その他数ある麗しい光景は、みなこれは迷信と呼ばれる想念から起るものなのであって、この想念こそは、「万物は一なり」というあの高遠な真理を、きわめて単純平明なかたちで説いているのである。

(池田訳) …これらを始めとする数多くの美しい光景は、すべて迷信といわれている想念から生まれ出てくるものであり、その想念が「万物は一なり」という崇高な真理を、きわめて単純な形で繰り返し説いてきた賜物なのである。

この「the Unity of Life (万物は一なり)」という考え方がハーンの仏教理解の核心であるようなのだが(前田専學、2021)、筆者はまだ理解できていない。前述の「ヘルン文庫」には、「V. RELIGION (CHIEFLY BUDDHISM) (宗教—主に仏教—)」に分類される本だけでも、864番から920番までの57点が存在する。*Glimpses*のChapter1からChapter6までをはじめとした文章から分かるように、ハーンはアメリカ時代から仏教に関心を持ち、広く深く学んでいる。

ある種の果てしなさも感じてしまうが、「ラフカディオ・ハーンと仏教」というテーマに対しては、先行研究の理解と同時に、*Glimpses*の精読から始めるのがよいと考える。本論の執筆はそのきっかけとなった点においても有意義であった。

テキスト・参考文献

テキスト

- 小泉八雲著・平井呈一訳『全訳小泉八雲作品集』第5巻・第6巻(恒文社、1964)
小泉八雲著・平井呈一訳『日本瞥見記(上)』『日本瞥見記(下)』(恒文社、1975)
ラフカディオ・ハーン著・池田雅之訳『新編 日本の面影』(角川ソフィア文庫、2000)
ラフカディオ・ハーン著・池田雅之訳『新編 日本の面影II』(角川ソフィア文庫、2015)
Glimpses of Unfamiliar Japan: two volumes in one, Lafcadio Hearn, Tuttle Publishing, 2009
Glimpses of unfamiliar Japan v. 1, v. 2, Yushodo, 1981 (Selected works of Lafcadio Hearn's first edition)

・Selected works of Lafcadio Hearn's first edition(小泉八雲初版本選集)は、雄松堂書店が出版した、ハーンの著書の初版本の複製本である。

参考文献

- 竹内信夫「ハーン「ニルヴァーナ」について」(『国文学 解釈と鑑賞』第56巻11号、至文堂、1991年11月)

小泉時・小泉凡編『増補新版 文学アルバム小泉八雲』（恒文社、2008）
小泉凡監修『小泉八雲記念館図録 小泉八雲、開かれた精神^{オープン・マインド}の航跡。』（小泉八雲記念館、2016）
「富山大学附属図書館所蔵 ヘルン（小泉八雲）文庫目録 テキスト版」（2019）
・富山大学附属図書館「ヘルン文庫」ホームページからダウンロードできる。
前田専學『ラフカディオ・ハーン 源郷としてのインド』（春秋社、2021）

平川祐弘監修『小泉八雲事典』（恒文社、2000）
國廣哲彌・安井稔・堀内克明編『プログレッシブ英和中辞典（第4版）』（小学館、2003）

[Internet Archive: Digital Library of Free & Borrowable Books, Movies, Music & Wayback Machine](#)（最終閲覧日：2024年2月22日）

[World Edition - The Atlantic](#)（最終閲覧日：2024年2月26日）

（千葉大学大学院人文公共学府博士前期課程在学）

資料 “Glimpses of Unfamiliar Japan” Preface の本文・現代語訳の対応表

凡例

- ・下の表は、“Glimpses of Unfamiliar Japan” の Preface において、ラフカディオ・ハーンによる本文と2種類の現代語訳を対応させたものである。
- ・平井呈一訳の出典は、『日本警見記(上)』(恒文社、1975)の「はしがき」である。
- ・池田雅之訳の出典は、『新編日本の面影』(角川ソフィア文庫、2000)の「はじめに」である。
- ・原則として、ハーンの本文の形式段落ごとに列を分けたが、第4段落の一部と考えられる「レッキキーの引用」は長いため列を分けた。
- ・第3段落は便宜上、文に①～⑨の番号を付している。
- ・池田氏は文章の読みやすさを考慮してか、ハーンの本文によらずに形式段落を分けている。段落冒頭の一字下げのほか、池田氏の意図をとらえやすくするために形式段落の間に空白行を設定した。

	ハーンによる本文	平井呈一訳	池田雅之訳
第1段落	In the Introduction to his charming “Tales of Old Japan,” Mr. Mitford wrote in 1871: “The books which have been written of late years about Japan have either been compiled from official records, or have contained the sketchy impressions of passing travelers. Of the inner life of the Japanese the world at large knows but little: their religion, their superstitions, their ways of thought, the hidden springs by which they move—all these are as yet mysteries.”	ミットフォード氏は、一八七一年に、その好著「古い日本の物語」の序文のなかで、次のように書いている。「近年、日本の国について書かれた書物は、官庁の報告書や記録類を編さんして作りあげたものか、さもなければ、行きずりの旅行家のスケッチ風の印象記を集めたものか、そのどちらかである。日本人の精神生活については、世人はほとんど知るところがない。日本人の宗教、日本人の迷信、日本人の物の考え方、日本人がそれによつて言動する隠れた動因——そういうものは、こんにちなお、依然として神秘の中にある」と。	一八七一年に、ミットフォード氏が上梓した、名著『古き日本の物語』の序文には、次のように書かれている。 「最近の日本に関する書物は、官庁の報告に準じたものか、通りすがりの旅行者が残した、うわべだけの印象にすぎない。日本人の内なる生活は、世界広しといえどもほとんど知られていない。日本人の宗教、迷信、思考様式、彼らを突き動かす隠れた原動力——これらはすべて、いまだに神秘のベールに包まれている」
第2段落	This invisible life referred to by Mr.	ミットフォード氏が言及したこの日本人の精神	ミットフォード氏が言及する日本人の生活こ

<p>2 段 落</p> <p>Mittford is the Unfamiliar Japan of which I have been able to obtain a few glimpses. The reader may, perhaps, be disappointed by their rarity; for a residence of little more than four years among the people—even by one who tries to adopt their habits and customs—scarcely suffices to enable the foreigner to begin to feel at home in this world of strangeness. None can feel more than the author himself how little has been accomplished in these volumes, and how much remains to do.</p>	<p>生活こそは、わたくしがこんにちまでに、多少なりともその片鱗をとらえることのできた、いわゆる「世界に知られざる日本」である。諸君は、おそらく、わたくしが垣間見たものの寥々たるのに失望されることだろう。なぜかといえ、たかだか四年たらずの月日を、この国の人たちの中で暮したぐらいでは——よしんば、その人間が、つとめてこの国の風俗習慣を身につけようとする人であっても、もともと国籍を異にする外国人が、何もかも不思議なくめなこの国の世界に、自分の国と同じような気安さとおちつきを覚えはじめるとは、とうてい四年やそこの滞留では事足りるわけがないからである。本書のなかに、果たしたものがいかに少なく、しのこしてあるものがいかに多いか、このことは、だれよりも著者自身が身をもって痛感しているところである。</p>	<p>そ、私がわざわざながら垣間みることのできた、「知られざる日本」の姿である。ひよっとしたら読者の皆さんは、私の瞥見したものがあまりにわずかなので、失望されるかもしれない。だが、たかだか四年余り日本人に交じって暮らしただけでは、たとえ、その社会の習俗を取り入れようと努力したにせよ、しよせんは外国人の限界は免れないであろう。かくも不思議なこの国に精通するには、四年くらいではとても及ばないのだ。本書において、どれだけ達成し得てないか、どれだけ残された課題が多いか、私本人が、誰よりも痛感している次第である。</p>
<p>3 段 落</p> <p>①The popular religious ideas—especially the ideas derived from Buddhism—and the curious superstitions touched upon in these sketches are little shared by the educated classes of New Japan. ②Except as regards his characteristic indifference toward abstract ideas in general and metaphysical speculation in particular, the</p>	<p>①日本の民間信仰——ことに仏教に由来する宗教観念、つまり本書のなかで触れておいたような、世にも珍奇な迷信は、これは新しい日本の知識階級のあいだではほとんど信じられていない。②総じてヨーロッパかぶれのした現代の日本人は、一般的な抽象観念、そのうちでもとくに哲学的思考について無関心だという特徴をのぞけば、知性の面では、教養あるパリ人、もしくはボスト</p>	<p>①本文で触れているような、日本の民間信仰、とりわけ仏教から派生した考え方や、珍しい迷信などは、新しい日本の知識階級にはほとんど受け入れられていない。②今日の西洋化した日本人は、抽象的な一般概念や、哲学的な思考には無関心であるという特徴は抜きにしても、知性の面では、教養あるパリ人やボストンの人々とほとんど対等といえる。③ところが、日本の知識階級は、超</p>

<p>Occidentalized Japanese of today stands almost on the intellectual plane of the cultivated Parisian or Bostonian. ③But he is inclined to treat with undue contempt all conceptions of the supernatural; and toward the great religious questions of the hour his attitude is one of perfect apathy. ④ Rarely does his university training in modern philosophy impel him to attempt any independent study of relations, either sociological or psychological. ⑤For him, superstitions are simply superstitions; their relation to the emotional nature of the people interests him not at all.* ⑥And this not only because he thoroughly understands that people, but because the class to which he belongs is still unreasoningly, though quite naturally, ashamed of its older beliefs. ⑦Most of us who now call ourselves agnostics can recollect the feelings with which, in the period of our fresh emancipation from a faith far more irrational than Buddhism, we looked back upon the gloomy theology of our fathers. ⑧Intellectual Japan has become</p>	<p>ン人と、ほとんど同列に立っている。③ところが、そういう日本の知識人は、こと超自然に関する意見となると、一から十まで、時によると不当と思われるくらいにまで、極端にこれを軽侮する傾向がある。たとえば、こんにち、宗教上の大きな問題に対するかれらの態度などを見ても、ぜんぜんそれは無関心の態度である。④大学時代におさめた近代哲学の修得が、事物の社会学的、あるいは心理学的な関連性を、独立して研究してみようなどという企てにかれらを追いこむことは、まずめつたにない。⑤かれらにとつては、迷信はたんに迷信なのであって、迷信と国民情操の関連性などということは、いっこうに興味のないことなのである。⑥しかも、このことは、かれらが自国の国民というものを、手の裏まで知りつくしているからというためばかりではなく、かれらの所屬している上層知識階級が、今もなおおろくつなしに、ただもう自分の国の古い信仰は恥ずべきものである。⑦思いこんでいることに起因しているのである。⑧もつとも、これはしかし考えてみればむりもないことで、われわれ西欧人にしても、こんにち、その大多数は、人間の知識などというものは絶対なものではない、おれたちは不可知論者だ、などといつて空うそびえているけれども、そのわれわれが、あの仏教なんぞよりはるかに不条理きわま</p>	<p>自然的なものに関する認識については、はなから過度に侮辱する嫌いがあり、刻下の宗教的の大事となると、完璧に無関心である。④大学で近代哲学を学んでも、社会学とか心理学とか、その学問的関連性を独立して研究しようなどという気はほとんど起こらないようだ。⑤彼らにとつて、迷信はただの迷信でしかないのだ。迷信と日本人の情緒との関連性などに至つては、まったくもつて興味の対象外である。</p> <p>⑨それというのも、日本人がみずから徹底して理解しているからというだけでなく、その知識階級が、きわめて当然のこととはいへ、いまだに訳もなく、自分たちの古い信仰を恥じているせいでもある。⑦人間の知識を絶対視しない不可知論者を自称するほとんどの西洋人なら、仏教よりも遙かに不合理な信仰から解放され、われらが先祖の暗澹たる神学を振り返ったときの感情を思い出してみればよからう。⑧知性ある日本は、このたった二、三十年の間に不可知論を唱えるようになった。このように精神的な変革が急激に行われたことが、今の上流階級の仏教に対する態度の原因のすべてである、とまでは言わないまでも、主要な原因の説明にはなるのではなからうか。⑨現在のところ、彼らの態度はほとんど狭量に近いと</p>
---	--	---

<p>agnostic within only a few decades; and the suddenness of this mental revolution sufficiently explains the principal, though not perhaps all the causes of the present attitude of the superior class toward Buddhism. ⑨For the time being it certainly borders intolerance; and while such is the feeling even to religion as distinguished from superstition, the feeling toward superstition as distinguished from religion must be something stronger still.</p> <p>* In striking contrast to this indifference is the strong, rational, farseeing conservatism of Viscount Torio—a noble exception.</p>	<p>る、古い信仰から新しく解放された時には、われ人ともに、自分たちの先祖の蒙昧暗愚な神学をふりかえってみて、うたた感慨なきをえなかったことを思い起すことができる。⑧ところで、日本の知識人は、ほんのここ二、三十年のあいだに不可知論者になったのである。この精神的進歩のあわただしさ、これがそもそも、日本の知識階級の仏教に対する態度の、まさか全部とはいえないまでも、すくなくとも主要な原因を解明してあまりあるものである。⑨いまのところ、かれらの態度は、たしかに頑迷に近いものがある。迷信・邪教とはつきり別物扱いにされている信仰に対してさえ、かくのごとき感情をいだいているのであるから、ましてや正当な宗教から截然と区別されている民間信仰に対するかれらの感情が、なおいつそう頑固であるのは当然なはなしたろう。</p>	<p>いえる。しかも、迷信とは一線を引く宗教に対してさえそうなのだから、正当な宗教と区別される迷信となると、彼らはいっそう頑なに受け入れようとはしない。</p>
<p>第4段落</p> <p>But the rare charm of Japanese life, so different from that of all other lands, is not to be found in its Europeanized circles. It is to be found among the great common people, who represent in Japan, as in all countries, the national virtues, and who still cling to their delightful old customs, their picturesque dresses, their Buddhist</p>	<p>ところが、日本人の生活のあのたぐいまれなる美しさ、世界の諸他国のそれとはおよそ趣を異にしているあの美しさは、おなじ日本人のなかでも、そういうヨーロッパがぶれのした上層階級のなかには見いだされないのである。これはどの国でも同じことだが、日本のうちでも、この国の国民的美徳を代表している一般大衆——つまり、こんにちなお自分たちの固有の美しい習俗になす</p>	<p>ところが、日本人の生活の類まれなる魅力は、世界のほかの国では見られないものであり、また日本の西洋化された知識階級の中に見つけられるものでもない。どの国でもそうであるように、その国の美徳を代表している庶民の中にこそ、その魅力は存在するのである。その魅力は、喜ばしい昔ながらの慣習、絵のようなあでやかな着物、仏壇や神棚、さらには美しく心温まる先祖</p>

<p>images, their household shrines, their beautiful and touching worship of ancestors. This is the life of which a foreign observer can never weary, if fortunate and sympathetic enough to enter into it—the life that forces him sometimes to doubt whether the course of our boasted Western progress is really in the direction of moral development. Each day, while the years pass, there will be revealed to him some strange and unsuspected beauty in it. Like other life, it has its darker side; yet even this is brightness compared with the darker side of Western existence. It has its foibles, its follies, its vices, its cruelties; yet the more one sees of it, the more one marvels at its extraordinary goodness, its miraculous patience, its never-failing courtesy, its simplicity of heart, its intuitive charity. And to our own larger Occidental comprehension, its commonest superstitions, however contemned at Tokyo, have rarest value as fragments of the unwritten literature of its hopes, its fears, its experience with right and wrong</p>	<p>み、絵のように美しい着物を身にまとい、そして仏の御身影やら神せせりに、かれら固有の、あわれにも麗しい祖先崇拜の心を牢として固く守りつづけている大衆のなかに、それは見いだされるのである。これこそは、もしも異国の観察者が運よくその中に入りこむことができ、そしてそれに共感をもつことができたなら、それこそ倦むということを覚えぬ生活である。いや、どうかするとそれは、われわれのうぬぼれている西欧文明の進みゆく道が、果たしてあれがしんじつ人倫向上の正道に向かっているものであるかどうかと、そんなことまでがつい疑わしくなってくるほどの生活である。その生活のなかにある、何かふしぎな思いもうけぬ美しさ、それは年を重ねるにしたがって、日いちにちと観察者の前にあらわれてくるだろう。もちろん、諸外国の生活と同じように、そこにはその生活自体のもつ暗い面も多少はある。しかし、それとても、西欧の生活の暗い面にくらべれば、まるで明るさそのものだ。そこにはまた、その生活自体のもつ弱点もある。愚昧な点もある。悪徳もあるし、残忍酷薄なところもある。けれども、よく見れば見るほど、その生活のなみなみならぬ良さ、奇蹟にも似たそのしんぼう強さ、いつも変らぬ折り目の正しさ、素朴な人情、さとり早い慈悲の心、そういうものに、見る人</p>	<p>崇拜を今なお守っている大衆の中にこそ、見出すことができる。もし外国人の観察者が、運よくその生活の中に入る事ができ、共感できる心を持っていたなら、それこそ、それは飽きることのない生活であり、そしていつしか、傲慢な西洋文明の進歩がこのような方向性でいよいよものか、疑わずにはいられなくなるであろう。</p> <p>年月を重ねるにつれ、日に日に日本人の生活の中から、珍しい予想もしなかった美しさが現れてくるであろう。もちろん、どんな生活にも暗い面はある。それでも、西洋のそれに比べれば、明るいものだ。日本の生活にも、短所もあれば、愚劣さもある。悪もあれば残酷さもある。だが、よく見ていけばいくほど、その並外れた善良さ、奇跡的と思えるほどの辛抱強さ、いつも変わるのではない懇懇さ、素朴な心、相手をすぐに思いやる察しの上さに、目を見張るばかりだ。</p> <p>さらに、西洋人のより広範な物の見方からすると、たとえどんなに東京などでは軽蔑されていようとも、もつとも大衆になじんだ迷信とは、希望や恐怖や善悪の体験、いうなら霊界の謎を解こうとする素朴な努力の、紙に書かれていない文学の断片として、珍重すべき価値があるのである。日</p>
---	---	--

<p>—its primitive efforts to find solutions for the riddle of the Unseen. How much the lighter and kindlier superstitions of the people add to the charm of Japanese life can, indeed, be understood only by one who has long resided in the interior. A few of their beliefs are sinister—such as that in demon-foxes, which public education is rapidly dissipating; but a large number are comparable for beauty of fancy even to those Greek myths in which our noblest poets of today still find inspiration; while many others, which encourage kindness to the unfortunate, and kindness to animals, can never have produced any but the happiest moral results. The amusing presumption of domestic animals, and the comparative fearlessness of many wild creatures in the presence of man; the white clouds of gulls that hover about each incoming steamer in expectation of an alms of crumbs; the whirring of doves from temple-eaves to pick up the rice scattered for them by pilgrims; the familiar storks of ancient public gardens; the deer of holy shrines, awaiting</p>	<p>はいよいよ驚きの目をみはってくるにちがいない。そうなってみて、われわれ西欧人流のやや寛大な物の見方で見てみると、日本の大衆生活のなかにごくざらにある迷信なども、東京ではそれは軽蔑されているけれども、あのなかには、日本の庶民生活のもっている希望・恐怖・正邪に対する経験——つまり、霊界のなぞに何とか解決を見いだそうとする蒙昧な努力の、文字に書かれない文学の断片として、大いに珍重すべき価値があるのである。日本の大衆のもつ比較的气軽な、親しみやすいそうした迷信が、どれほど日本人の生活の美しさを増しているか、このことは、日本の内地に永年住んだことのある人だけにわかることだ。そうした迷信のなかには、多少は邪教もある。キツネつかいなどはその一例であるが、しかしこういうものは、今日では教育の一般普及によって、どしどし撲滅されて行きつつある。そのかわり、そういうものを除いたあとの大部分の迷信には、その意想の美しさという点で、こんにちなお、西欧の高踏詩人たちが、しきりとそこからインスピレーションを見いだしている、かのギリシヤ神話に匹敵するものがあるくらいである。そうかと思ふと、一方また数多い迷信のなかには、ふしあわせなものに情をかけたなり、生きものを憐れんだりすることを奨励するようなものもあつて、そうい</p>	<p>本人の屈託のない親しみやすい迷信が、どれだけ日本人の生活に妙味を添えているかは、その中にどっぷりとつかつて生活してみれば、美によく理解できることであろう。迷信にも、狐の悪霊などのように、数は少ないが不吉なものもある。だが、こうしたものも、公の教育の普及によって急速に消えつつある。むしろその多くは、その発想の美しさで、今日の著名な詩人がいまだに想像力の源泉としている、ギリシヤ神話に匹敵するほどである。</p> <p>また一方では、迷信の中には、不幸な人への親切や、動物愛などをすすめるものも多くあり、それらは、喜ばしい道徳観を生み出している。家で飼われる動物は、人なつこいし、野生動物は、人前でもあまり動じない。汽船が入港するたびに食べ物の屑を恵んでもらえると期待し、白い雲のように集まつてくる鷗の群れ。参拝者がばらまいた米粒を拾いに、寺の軒から羽をはばたかせて舞い降りてくる鳩。古風な公園に飼われている人慣れた鶴。お菓子や人間になでられるのを待つている神社の鹿。人影が水に映ると、聖なる蓮池から頭を突き出す魚。これらを始めとする数多くの美しい光景は、すべて迷信といわれている想念から生まれ出てくるものであり、その想念が「万物は</p>
--	---	--

<p>cakes and caresses; the fish which raise their heads from sacred lotus-ponds when the stranger's shadow falls upon the water—these and a hundred other pretty sights are due to fancies which, though called superstitious, inculcate in simplest form the sublime truth of the Unity of Life. And even when considering beliefs less attractive than these—superstitions of which the grotesqueness may provoke a smile—the impartial observer would do well to bear in mind the words of Lecky:</p>	<p>う迷信は、何よりも喜ばしい道徳的効果をうみだしている、日本の家畜のあの心慰まる顔つき、野鳥やけものが人前に出ても、さして人怖じしないあの人なつつこさ、港へ汽船がはいってくると、恵んでもらえる食物の屑をあてに、船のまわりによってぐる白い雲のようなカモメの群れ、参詣人がまいてやる米をひろいに寺の屋根から羽ばたきをして降りてくるハトの群れ、古風な公園などに飼われている人なれたツル、菓子と、人になでてもらうことを待っている神社のシカ、人の影が水にうつると滑らかなハス池のなかから頭を出してくるコイの群れ。——こうした景色や、その他数ある麗しい光景は、みなこれは迷信と呼ばれる想念から起るものなのであって、この想念こそは、「万物は一なり」というあの高遠な真理を、きわめて単純平明なかたちで説いているのである。また、この種の迷信よりもはるかに興ざめをするような信仰——その怪奇な点に思わず失笑噴飯させられるような毒々しい迷信を考察するようならばあいにも、もし公平な観察家だったら、当然、レッキーのいった次のことばを思いおこすだろう。——</p>	<p>一なり」という崇高な真理を、きわめて単純な形で繰り返して説いてきた賜物なのである。こうした迷信とは違い、その怪奇さに思わず笑い出してしまふような、味気ない迷信のことを考えてみても、公平に見れば、レッキーの次の言葉を思い浮かべることだろう。</p>
<p>“Many superstitions do undoubtedly answer to the Greek conception of slavish ‘fear of the</p>	<p>「多くの迷信は、ギリシヤ人のいわゆる『神々に対する卑屈な畏怖』をいさぐという思想に、疑い</p>	<p>「多くの迷信は、ギリシヤ人の盲目的な『神々への畏怖』という認識に、まさしく呼応するもので</p>

<p>キ 引 の 用</p>	<p>Gods,' and have been productive of unspeakable misery to mankind; but there are very many others of a different tendency. Superstitions appeal to our hopes as well as our fears. They often meet and gratify the inmost longings of the heart. They offer certainties where reason can only afford possibilities or probabilities. They supply conceptions on which the imagination loves to dwell. They sometimes impart even a new sanction to moral truths. Creating wants which they alone can satisfy, and fears which they alone can quell, they often become essential elements of happiness; and their consoling efficacy is most felt in the languid or troubled hours when it is most needed. We owe more to our illusions than to our knowledge. The imagination, which is altogether constructive, probably contributes more to our happiness than the reason, which in the sphere of speculation is mainly critical and destructive. The rude charm which, in the hour of danger or distress, the savage clasps so confidently to his breast, the sacred picture which is</p>	<p>もなく合致するものであって、これはこんにちまでいろいろと言いつくしがたい不幸を人類にもたらしてきたのであるが、しかし、数多い迷信のうちには、それとはまた違った性質をもったものも、ずいぶん多い。迷信は、われわれの恐怖に訴えると同時に、われわれの願望にも訴えるものである。ときには、人間の心情の最も深い渴望と結びついて、それに満足をもたらすこともある。また、人間の理性が、これはできそうだが、これはありそうだという、いわゆる可能性と蓋然性の判定を下すものに対して、迷信は、それにはつきりとした確実性をあたえてくれる。それからまた、迷信は、人間の想像がとかくそこに足をどどめたがる想念を、われわれにあたえてくれる。ときにはまた、道徳上の真理に、ひとつの新しい裁可を下してくれることもある。そうかと思つたまた、迷信のみが満たしうる欲求、あるいは、迷信のみが鎮めうる恐怖、それを迷信は生みだしながら、しばしば、人間の幸福のたいじな要求ともなる。慰藉というものが大いに必要な意気消沈のときとか、心に屈托のあるときなど、迷信のもつ慰藉の力は、もつとも大きく感じられる。人間は、とかく知識のおかげをこうむるよりも、妄想のおかげをこうむることが多いものだ。思索の世界において、批判的で、かつ破壊的な理性よりも、つね</p>	<p>あり、それは、これまで人類に言いつくしがたい不幸を生み出してきた。しかし、そうでない傾向を持つものも非常に多い。迷信は、われわれの恐怖心に訴えかけるだけでなく、希望にも訴えかけるものがある。往々にして、心の奥底の要求に合致し、それを満足させることもある。理性が可能性や蓋然性を判断する上で、迷信がかえってその真偽に太鼓判を押してくれる存在であったり、想像力のわき出る泉であったりもする。ときには、それが、道徳的真理に新しい判断を下すときもある。また、迷信のみが満たすことのできる欲求、迷信のみがなだめうる恐怖を生み出すことで、迷信が人間の幸福になくしてはならないものになることも多い。元気をなくしたとか、困難に陥つたとか、人が一番慰められたいときに、迷信はその持ち前の力を最大限に發揮する。</p> <p>人間は、知識よりも幻想に頼る存在なのだ。思索する上で、たいがい批判的で破壊的な理性よりも、全体的にみて建設的な想像力の方が、われわれの幸福に貢献するのではないだろうか。人間が本当に困つたときには、気取つた哲学理論よりも、粗野な人でも、危険時や困窮時に思わず胸に握りしめる粗末なお守りや、貧しい人の家にもご加護を注ぎ、守つてくれると信じられている御神</p>
----------------------------	--	---	--

<p>believed to shed a hallowing and protecting influence over the poor man's cottage, can bestow a more real consolation in the darkest hour of human suffering than can be afforded by the grandest theories of philosophy...No error can be more grave than to imagine that when a critical spirit is abroad the pleasant beliefs will all remain, and the painful ones alone will perish."</p>	<p>に建設的な想像の力の方が、われわれの幸福に貢献するところが大きいかもしれないのである。危急困難の際に、野蠻人がそれひとつを頼みに、胸にひしどかきいだくあの粗末な守りれとか、あるいは、貧しきものが自分のあばら家に、あらたかな守護の力を降らしてくれると信じている神の御像とか、そういうものが、人間の艱苦のもっとも暗澹たるときに、哲学のもっとも塚大な学説によつてさずけられるものよりも、かえって目の前に、より強力な、より真実の慰藉を、人間にあたえることができるのである。……批評精神が普及しさえすれば、そのときこそは、愉しい信仰がごとごとく残り、苦しみの多い信仰がごとごとく跡を絶つ、などと考えるくらい、謬りの大なるものはなからう。」</p>	<p>像の絵の方が、実際に心を癒してくれるのである。批評精神が広まれば、楽しげな信仰がすべて残り、苦痛を強いる信仰はごとごとく消え失せる、と思ひこむのは浅はかな考えである」</p>
<p>第5段落 That the critical spirit of modernized Japan is now indirectly aiding rather than opposing the efforts of foreign bigotry to destroy the simple, happy beliefs of the people, and substitute those cruel superstitions which the West has long intellectually outgrown—the fancies of an unforgiving God and an everlasting hell—is surely to be regretted. More than a hundred</p>	<p>こんにち、近代日本の批評精神が、この国の素朴にして幸福なる信仰を破壊して、それにかわるに、すでに西欧においては知性の着る衣料としては廃れ物になってしまった、あの残忍な迷信——宥すといふことの絶対のない神と、永遠の地獄とを想像させる迷信——をひろめようとする、外来人の執拗な努力に反対するどころか、むしろ、間接にそれを助長させているのは、まことに惜しむべきことである。今から百六十年あまりも前に、</p>	<p>まことに残念なことに、近代日本の批評精神は、日本人の素朴で幸せな信仰を破壊し、それに代えて、西洋の知性ではもともとくに廃れてしまった、あの残忍な迷信——宥さぬ神と、永遠の地獄とを心に抱かせようとする迷信——を広めようとする諸外国の執拗な試みに、対抗するどころか、間接的に加担している。今から百六十年以上も前に、ケンペルは、日本人のことをこう書き記している。「美德の実践、汚れなき生活、信仰の</p>

<p>and sixty years ago Kaempfer wrote of the Japanese: "In the practice of virtue, in purity of life and outward devotion, they far outdo the Christians." And except where native morals have suffered by foreign contamination, as in the open ports, these words are true of the Japanese today. My own conviction, and that of many impartial and more experienced observers of Japanese life, is that Japan has nothing whatever to gain by conversion to Christianity, either morally or otherwise, but very much to lose.</p>	<p>ケムペルは日本について次のように書いている。「徳行の実践と、生活の純潔と、信仰上の儀礼と いう点では、日本は、はるかにキリスト教諸国に まさっている」と。このことばは、こんにち、日 本内地の各地の開港場におけるように、この国固 有の風儀が、外国人によって汚されているような 土地を除けば、現在の日本についていはいばあいに も、偽りなき真実のことばである。わたくし自身、 多数の公平にして且つわたくしなどよりもさら に経験の深い、日本人の生活の観察者の確信する ごとく、日本はキリスト教に改宗することによつ て、道徳上にもその他の点においても、得るところ は一物もないかわりに、失うことのはなはだ多 いということ、を、固く信じて疑わぬものである。</p>	<p>儀礼において、日本人はキリスト教徒をはるかに 凌いでいる」と。開港都市のように、本来の道徳 律が外国人によってはなはだしく犯されている 地を除けば、この言葉は、今でも日本人に当ては まるといえる。日本がキリスト教に改宗するな ら、道徳やそのほかの面で得るものは何もない が、失うものは多いといわねばならない。これは、 公平に日本を観察してきた多くの見識者の声で あるが、私もそう信じて疑わぬ。</p>
<p>第 6 段 落</p> <p>Of the twenty-seven sketches composing these volumes, four were originally purchased by various newspaper syndicates, and reappear in a considerably altered form, and six were published in the "Atlantic Monthly" (1891-93). The remainder, forming the bulk of the work, are new.</p> <p>L. H. KUMAMOTO, KYUSHU, JAPAN, May, 1894.</p>	<p>(省略)</p> <p>一八九四年五月 日本 九州 熊本にて ラフカディオ・ハーン</p>	<p>(省略)</p> <p>一八九四年五月 日本 九州 熊本にて ラフカディオ・ハーン</p>